

■大賞「後藤新平と日露関係史」

## ワシーリー・モロジヤコフ氏



後藤新平については多少は勉強してきたつもりだが、本書を通読して未知のことがあまりに多いことに気づかされた。確かに日露戦争後の日露関係は近現代史学において空白のままに残ってきた。

実際、後藤新平は3度の訪露を通じてロシア要人と深く関わる機会をもった日露戦後の両国の有力な仲介者であり、かつ「親露派」の巨頭であったという程度の知識は私ももっていたが、彼がスターリン（チエーリン外務人民委員、カラハン外務人民委員代理など）の息づまるような対論を通じて日露協調の方針を探し求めていた人物であることには思いが及ばなかった。

無理もない。何しろ後藤とロシアとの関連を記した世界初の著作が本書だというのだから。日本語とロシア語に通じ、激しいばかりの追究心をもって資料検索を重ねて書かれた本書の価値はきわめて高い。読む者を日露交渉の現場に誘い込んでいくような迫力が本書にはある。

「中国の争乱の主因は、抑圧者にたいする被抑圧階級の烈しい闘争である。このような状況下では共産主義思想が流布することは不可避であろう。不安定が存在するところに、コミニテルンは成立する」とスター・リンがいえば、「ロシアの対中行動の誤りは、中国の実情を理解しないで、行動を急ぎ過ぎているからではないか。旧文

## 近現代史の空白 見事に埋める



1968年モスクワ生まれ。93年モスクワ国立大卒、96年同大学院博士課程修了。歴史学博士（Ph. D.、モスクワ国立大学、96年）、国際社会科学博士（Ph. D.、東京大学、2002年）、政治学上級博士（L. L. D.、モスクワ国立大学、04年）。03年から拓殖大学日本文化研究所主任研究員、客員教授。法政大学日ロ関係研究所特任研究員も兼務。日本近現代史・国際関係史専攻。ロシア語の著書に「日本における保守革命——思想と政治」（99年）、「ロシアと日本 障害を越えて——知られざる日露関係史1899～1929年」（05年）、「ロシアと日本 戦争か平和か——知られざる日露関係史1929～1948年」（05年）など。

する事になる。【評】渡辺利夫

# 第21回アジア・太平洋賞